

神戸っ子 昭和39年12月25日発行 560円 神戸新聞社発行 神戸市1015号

郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子

12
月号



1250/50

monthly magazine kobekko december 1964 no, 45



Mikimoto Pearls

世界で自慢のできる日本の宝石は
〈ミキモトパール〉です。

選びぬかれたつぶよりの ミキモト
パールが、あなたを気品で包みます。
クリスマスパーティーでも
あなたをいっそうひきたてます。



ミキモトパール
御木本真珠店

神戸店＝三ノ宮・神戸国際会館 Tel. 22-0062

大阪店＝堂島・新大ビル Tel. 363-0247

本店＝東京・銀座四丁目

Merry Christmas



田崎真珠

三宮店：新聞会館秀品店内
ニューポート店：ニューポートホテル内

東京：銀座店 ヒルトンホテル店
オータニホテル店 羽田：東急ホテル店

札幌：ホテル三愛店

PEARLS by TASAKI

楽しいつどいに タサキパール



われら
神戸っ子

パトリシア・ジェー
デヘーズ・ムーア

19

英国には「輪なげ」はない、しかし「Horse Shoe」（蹄鉄なげ）は非常に盛んだということである。輪なげは恐らくその変型ではないかといわれる。神戸の裏山では、朝の登山会でこの輪なげ競技が今も盛んに行われている。パトリシアさんは神戸生れの英国人のお嬢さん 家庭で英語会話を教えていらっしゃるという。

撮影 / 西村雅司





Merry Christmas!

確信をもってタジマの目を選んだ世界の宝石の名品

Tajima
宝飾店 **タジマ**

元町2・TEL 0330387・25

われら
神戸っ子

20

ジャン・メルオー
バリー外国宣教会司教
英知大学教授

ジャン・メルオー氏は世界屈指のオルガンの奏者で、昭和24年に神戸に來られたバリ生れの神戸っ子である。開口一番「そう、神戸に帰ってきたら、ほっとします。住むには神戸が最高ですね」と言われた。ジャン・メルオー氏の発言は鋭い。「神戸はいい町で、最近物質的な点で進歩が見られます。しかし、町の魂、精神、そういう文化面で大変遅れています。私でも神戸の為になる活動が出来れば喜んで参加しますよ。いまからでもいいのです。町の精神ということを考えてほしいですね。神戸の催しに京都の交響楽団がきます、恥かしいです」とズバリと言われる。颯爽たる見識である。「私ですが大正14年生れです」と笑われると優しい童顔があらわれる。

(大阪玉造「聖マリア大聖堂」で12月13日とクリ
スマス・イブにバイブ・オルガンを演奏される)

楽しいXマスには

今年もヒロタの



Xマスケーキを

洋菓子のヒロタ

元町店・元町本通り3丁目 TEL 33-2340・2281

三宮店・新聞会館内秀品店 TEL 23-2312

12月号目次



- ☐ 1 Second Cover / 絵・中西 勝
- ☐ 3 グラビヤ／われら神戸っ子・撮影／西村雅司
⑱パトリシア・ジェー・デ ヘーズ ムーア
⑳ジャン・メルオー
- ☐ 9 わたしの意見／畑専一郎
- ☐ 10 エトランゼ特集・随筆(1)／ふるさとコウベ・
アンナ・ラッセン(2)／モディさんのこと・
折茂安雄
- ☐ 14 ずいそう／最高の芸術とは・牛尾吉朗
- ☐ 17 随筆／マリのユートピア・田辺聖子
- ☐ 19 連載随想第29回／タぐれの散歩・白川 渥
- ☐ 21 ヨーロッパ“気楽”な旅(その4)
クリスマスとジルベスター・古林喜楽
- ☐ 25 神戸っ子放談／玉井 操
- ☐ 28 経済ポケットジャーナル
- ☐ 31 るぼるたーじゅ・コウベ⑤／賀川記念館・松原
新一
- ☐ 37 オリエンタルホテル・ア・ラ・カルト(その6)
- ☐ 38 映画のこと手当たり次第⑩／淀川長治
- ☐ 40 こんにちわ船長さん／⑦すみれ丸・玉奥 章
- ☐ 42 パリ通信④／パリのノエル・佐藤 昭
- ☐ 45 季節のモード・福富芳美
- ☐ 51 KOBE クリスマスパーティへのご招待
- ☐ 55 幕しのバラエティNo.10・ノエルのお菓子
- ☐ 59 エトランゼ特集／座談会・エトン ゼの見た神戸
- ☐ 66 ピンクコーナー(T)
- ☐ 68 小磯良平画集のこと
- ☐ 71 神戸の集いから／蛸10節始末記
- ☐ 72 神戸遊戯誌16／硬式テニス①・青木重雄
- ☐ 74 神戸うまいもん巡礼No.28・赤尾兜子
- ☐ 76 紳士入門②／食道楽紳士・竹田洋太郎
- ☐ 78 ポケットジャーナル／花時計
- ☐ 80 Kobekko Shopping Guide
- ☐ 85 神戸を楽しむ私のコース⑤／勝 陽子
- ☐ 86 連載・第20回／神戸夫人・武田繁太郎
- ☐ 90 愛読者サロン
- ☐ 92 グラビヤ／わんぱくエトランゼ・緒方しげを

表紙／小磯良平・撮影／米田昌弘・米田定蔵・レイアウト／橘 正三

Fachrein's

ドイツ菓子

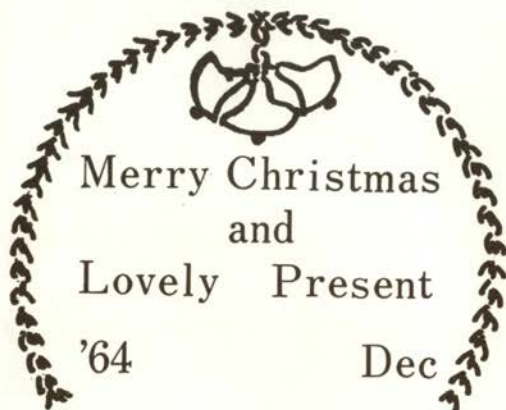
吟味された材料に
洗練された技術を
加えて“生”の持味
を充分に生かした
お菓子です。

ピラミッド
ビスケット
各種ケーキ
各種詰合せ

ユーハイム

本店・三宮生田神社西隣
三宮店・大丸前市電筋
神戸そごう・神戸三越・神戸大丸
国際名菓・その他有名百貨店

MAC Golden X'mas



♡ 彼女とデート

S	M	T	W	TH	F	SU
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

● マツワでショッピング

★ フリスマッシュ

※マックは12月は休みません※

男の服飾

マック

三宮本店 神戸センター街
TEL ☎ 0895
トアロード店 センター街西口
TEL ☎ 0896
新開地店 新開地本通り
TEL ☎ 7688
姫路店 姫路駅デパート
TEL ☎ 1261

＊わたしの意見

万国博を

神戸で開こう

畑 専一郎（神戸新聞主筆）



昭和35年の所得倍増計画、今年のオリンピック、昭和45年の万国博（開催予定）というふうにみてくれば、日本経済は、ほぼ5年間隔に行われる大きな事業とともに進展していることに気づきます。そして、オリンピックの終った現在、次に見するべき目標は、いうまでもなく万国博でしょう。

私の判断では、万国博はその規模の大きさにおいて、おそらくオリンピック以上の行事になるはずで、外国からの参観者動員数が約百万人、国内のそれがほぼ五千人と見込まれていますし、又、二千五百億円の出費に対して収入は四千三百億円と予想されていますから、そこには約一千八百億円の収益が見込まれる計算になります。問題は、その会場です。第一会場は、すでに千里山が決定的だといえますが、第二会場を是非神戸市に誘致するべきだというのが、私の主張であり希望なのです。

万国博の開催如何によって、おそらく神戸の将来も決定されるのではないかと思われるからです。特にこれからは、瀬戸内経済圏開発の時代に入るとしうし、又、内陸工業地帯よりは臨海工業地帯が重視されつつある現代の情勢から考えて、海に面した神戸は、万国博会場として極めて理想的な位置にあるといっているのです。東部埋立地第4工区（50万坪）を会場にしようという立案の根拠もそこにあります。

一八五一年に第一回万国博がバリで開かれて以来、パリのエッフェル塔、サンフランシスコのゴールデンブリッジ、種々の美術館など、万国博は幾多の遺産を残してきました。そういう意味で、例えば夢のかけ橋の実現も神戸への万国博会場誘致の成否いかにかかっているといつていいかもしれません。

このように、神戸の発展に大きな関係をもった万国博問題について、地元の経済界の人々の関心がややうすいように思われるのですが、これは大へん残念です。地域社会の開発に利益することは明らかである以上、多くの人々の盛りあがる熱意を期待したいものです。

ふるさと コウベ アンナ・ラッセン

50年ぶりに神戸を訪れたアンナさん



お母さん・お兄さんと写した記念写真。鷹取海岸の家にて。

アンナさんの生家。ここに現在のオリエンタルホテルがたっている。



お兄さんと日なたぼっこのアンナさん。

コウベ——なんと懐しい町でしょう。それは、私が生まれ、幼年時代を過ごした、忘れることのできない町です。私が生まれたのは、一九〇二年、つまり明治三五年です。

そして、以後11年間にコウベで暮しました。生田区京町25番地で生れたのですが、今度、約50年ぶりにコウベを訪れ、さてどこだったかしらと、遠い記憶の世界をたぐりよせるようにして、生家のあたりを探し歩いたのですけど、当時とはすっかり様子が変わってしまい、文字どおり感慨無量の思いを味わいました。後で分ったのですが宿泊していたオリエンタルホテルの建っている場所が、京町25番地だったので、びっくりしてしまいました。

今度、コウベに来るにあたって、あちこちでこの旅行の目的について、「オリンピックですか」と訊ねられたのですが、そのたびに私の答は「ノー」でした。つまり、私は日本へ、というより、ふるさと、コウベを訪ねて来たつもりでいるからです。

コウベの思い出。それはもう、遠い幻の世界にかすんでみえます。何から話せばいいでしょう。子供の頃は、日本語も上手だったのですが、今はほとんど忘れました。わずかに、「こんにちわ」「おもち」「おつけもの」「スキヤキ」などの言葉を憶えている程度です。でも、言葉は忘れていても、また遠い過去のことであっても、忘れられぬ記憶というものはあるのです。

鷹取海岸の近くに住んでいた頃のことです。(当時は海岸付近にしか家が建ってなくて、山側はススキ野原や畑ばかりでした) いつでしたか、家の近くに大きな石の台があって、私は、自分が記念碑か銅像にでもなったつもりで、それに乗って神妙にポーズをつくっていましたすると、傍を野菜売りのおばさんが通りかかち、「今、何時ですか?」と訊くのです。私は、立派な銅像のつもりでいるのですから、大へん心外に思い、黙って立っていたのです。また、海の素晴らしさも忘れられませんでした。今度も、どうしても泳ぎたくて、10月もなかば過ぎだと

いうのに、須磨の海で泳ぎました。毎日でも泳ぎたい気持です。ドイツと比べてコウベはすいぶん暖かいのです。して苦にはならないからです。

遊戯といえど、「おじゃみ」などをしてよく遊んだものです。その頃使っていたおじゃみを、今も私は大切に持っています。学校に行く時、いつも見ていた錨山のたずまいも、永く忘れられない懐しい景色です。

その頃は自動車もなく、もっぱら人力車の時代でした。学校からの帰途、雨に会ったりすると、人力車で駅まで迎えに来てもらったのですが、道路にしても、舗装のしてあるのは元町くらいのものでしたから、大きく変化したコウベを前にして、50年の歳月の流れを今さらのよう感じずにはいられません。それから、ちょっと気になるのは、日本ではごく子供が自由に育てられていることです。一例をあげると、電車に乗っても、すぐに子供のために人々が席をゆずってあげる光景にぶつかりますが、ドイツとは少し違っているように思います。

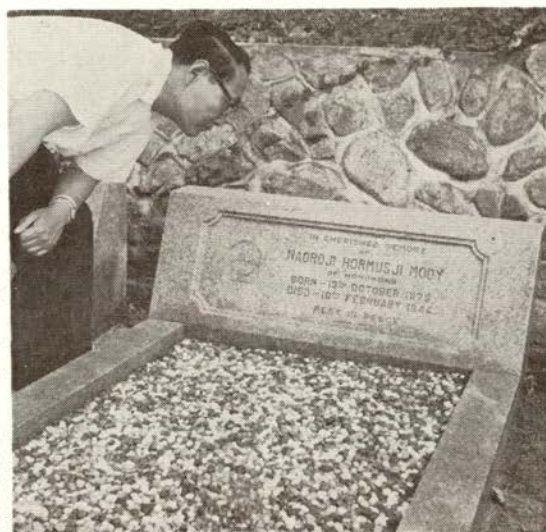
少しもの足りないと思えるのは、女性の和服姿がほとんど見あたらないことです。これは一例にすぎませんが日本的なよいものが、次第に失われてゆくのは、やはり残念です。もっとも、歴史はたえず動いていくものである以上、あまりセンチメンタルになっても仕方ないことかもしれません。昔のコウベは、大へん静かで、パラダイスのような感じでしたが、現在は少し騒がしいような感じを受けます。でも、やっぱり私はコウベが好きです。

第一次世界大戦が始まって、ドイツに帰ったのですが、それ以後は戦争の連続で、辛い、悲しい経験が多かっただけに、なおさら平和と幸福につつまれて暮した、コウベでの生活が、懐しく美しいものに感じられるのです。いつか、必ずコウベを訪れたい、それが私のながい間の夢であり、希望でした。それがかなえられて、今私はたとえようもない幸福と喜びをかみしめています。

— 追憶の記 —

モデイさんのこと

折茂安雄



昭和18年のある日、日本の戦局好転せず、町から商品が次々と姿を消していった頃だが、さびれかけた元町商店街を、足どり重く、疲労の面影を宿した印度人が、飾り窓を見ながら、猫背姿で歩いていた。六十の坂を越えた老紳士。頭髪は薄かったが、眼鏡からステッキ、靴といずれも超一級品で、その頃のよれよれの国民服が、街のふつうの服装であった中では、その堂々たる装いは一際光って見えた。彼の名は、N・H・モデイ氏。どんな過去を持ち、何故に日本に住んでいるのか、誰も知らない。彼は、オリエンタルホテルの三階の三室を借り切って

その価値も計りしれないものだという。また、彼の生活ぶり、一般人と比べあまりにも変わっていた。終日、暗い部屋で宝物と対してニタリニタリしてはいるが、極端な人嫌いで人には一切会わず、知己もなく妻子もなく、異郷に文字通り孤独に暮し、孤高に徹し切っていたのである。その奇人ぶりを、ジャーナリズムがとり上げたことがあり、昭和の奇人として、一種の神戸の町の名物男となっていたことはたしかである。そして、この謎の人物と謎の金銀は、当時の人々の暗い心に、一服の推理小説的な興味を与えていた。

独居しているのであった。当時、高級ホテルの一室を一

さて、私とモデイ老とは元町でパツタリ会った。

晩借りるのさえ、経済上負担になってむずかしいことで

「今日は、モデイさん。お散歩ですね」

あったのに、三室を独占して、既に3年間にもなろうとして

「おお、ミスター・オリモ。お暇なら私の所にいらっしやい。」

だけではない。彼の住む三室には、日本の古文化財が蒐集されていて、足の踏み場もないほどである。噂による

こうして私は、もうその頃には町から姿を消していたお菓子や飲物を、ホテルの一室でたくさんいただき、彼の最近の自慢の蒐集品を拝見して引き上げたものである。

なぜ私が、モデイさんと親しくなったのかは、はっきり記憶していない。しかしモデイさんとの最初の面会は、当時私の職場が、市の観光課だったので、新聞で彼の存在を知り、その蒐集品の展覧会を開くべく、彼に依頼に行ったのが最初のように憶えている。モデイさんの蒐集品が、展覧の価値があるかどうかを教えて下さったのは池長孟氏であり、氏は当時、まだお元気で自から池長美術館の館長の職におられた。モデイさんが、一介の市の吏員であった私に、すぐ会ってくれる筈はないのに、どうしたことがか、私はさして困難なこともなく、すぐ親しくなったように記憶している。何度目かにお会いした時「君は、僕がこんな素晴らしい物を見せても、少しも欲しそうな顔をしないのはどういうわけか」と、訊ねられたことがあった。私は、こんなふうには答えたようだ。

「私個人は、こんな貴重品をもらっても処分困ってしまう。それより、あなたの蒐集の努力を見識のある人々に知ってもらうために、展覧会を開いたらどうだろう。そして、会場の保管の責任は市が持つとしたらどうか」急にモデイさんの顔が明るくなった。市当局が、責任を持ってくれるならやってもよいと答えてくれた。そんな次第で、神戸三越を会場にして展覧会を開く運びになったのである。

モデイ氏蒐集品展覧会の模様は、すさまじいものであった。展覧会開催の6日間というものの、三越は商品も売れることも出来ず、殺到するお客さんの整理に、全店員が汗だくで当らざるをえないくらい盛況だったのである。最終日には、噂を聞いた好事家が全国からつめかけ、とうとう相生橋警察署の協力を得なければ、人が捌き切れなくなった。相当の年輩の神戸市民の方々なら、あるいは当時の模様を記憶しておられるのではあるまいかと思う。ともあれ展覧会は、大成功裡に終わった。私のアルバムの中に、三越支店長や私どもと並んで得意そうなモ

デイさんの姿が残っている。もともと、市の首脳部からは「化け物のような展覧会を市の主催でやるのはけしからん」と散々文句が出ていたらしいのだが、結果がよかったので救われたが、それほどモデイさんは怪人物と思われる、その蒐集品は疑問を持たれていたものであった。彼の蒐集の傑作は和時計である。現存していれば、当然国宝級のものであろう。その他、蒔絵文箱、櫛、煙管など工芸品が多く、南蛮美術の優秀品もあって、池長美術館長も、垂涎おくあたわざるものがあつたことは、館長が私に洩らした言葉からも、充分察することができた。それにしても彼の蒐集品は悉く焼失してしまったのである。戦局急を告げ、各人が疎開を始めた頃、モデイさんの財宝も、オリエンタルホテルから海岸通りの倉庫に移された、という話を聞いたことがある。また、保険をつけたくとも、当時としてはその術がないのだ、とも聞いた。かつて私は、ホテルの一室で彼と語り合った時、こう言った。

「今仮りに、神戸市が耐震耐火の美術館を造って、その一室をモデイ室とするならば、あなたは市に、相当なものを寄付する意志がありますか」モデイ氏は笑って答えなかった。全くの仮定の話であつてみれば、モデイ氏も即答のしようもなかったであろう。

今年の夏、蟬しぐれの再度山奥の外人墓地を訪ねた。そこにモデイさんの墓があつた。彼の国籍は印度となつており、生年一八七五年十二月十日、没年一九四四年十月二日。つまり終戦の前年、六十九才でなくなっている著書に「和時計の蒐集」（昭和七年神戸とロンドンで発行）がある。この彼の唯一の著書の扉には、「私の母にささぐ」という母への愛情がうたつてある。神戸では天涯孤獨の身であつたモデイさん。今、異郷に眠るモデイさん。霊はおそらく故国の母と会っていることであらう。

（神戸市葺合区区长）

— 写真はモデイさんの墓に見入る折茂安雄氏 —

□ずいそう□

最高の芸術とは

牛尾 吉朗

先日友人の強制でマース・カニングハム舞踊団の公演をみる破目においこまれた。僕のマース・カニングハムに対する知識はモダンダンスの世界的な舞踊家であるというのを頗る前衛的なある男から聞かされていたこと以外何もなかった。それにこの公演を神戸J.C.がラジオ関西と協賛で後援した義理もあり、自分の芸術的センスに対する評価にもなると信じて国際大劇場へ出発した。

既に第一部は開幕されているが舞台は青いホリゾン・ライトがつき、誰もいないその上を見ヘリコプターの如きものが光を放って横切って飛んでいる。

「なるほどこれがローシエンバーグのオブジェと称するものなのか」ということが理解できたのはパンフレットを買った後の話で、まず会場一面にみなぎる雰囲気、異様に若干圧倒された。バレエをみる観客には常に陶醉がつきまとうものだが、その反応は全くみられない。席につくまで鋭い不快な音が耳をつんざく。

『これは一体なんだろう。どういうことなのか』疑問をもちながら座った。その疑問もしばらくするうちにわかった。音楽は、チャンス・オペレーションで有名なジョン・ケージ。説明を全く必要としないというより、拒否する音いわば物性学的に捉えられるべき音の塊り、彼の音楽は「聴く」という行為にだけ全力を集中することを要求する。しかし、舞台上で演じられ踊られているものは題名を「永劫」という舞踊である。マース・カニングハムは、落下し、転回し、飛上り、分散する踊りへ目の集中を要求する。

みているうちに僕は、分裂しそうになる自分を感じ

た。そして観客の大半が、いや全部が僕と同じ聴覚と視覚の分裂に悩み、それが会場の雰囲気をかもしだしていることに気付いた。延々とつづく原始的なテンポの踊りと、聴くことを強要する音塊に、僕は不機嫌になり怒りっぽくなりはじめた。チャンス・オペレーションというのは、聴衆をねじ伏せ、芸術家(?)に屈伏させるまであきることなく持続させるという悪癖がある。それに視覚が分裂的に加われば怒りたくなるのは当たり前だ。

僕は、「しかし待て」と怒る心をとめた。ここで怒ってしまったては彼らの思う壺ではないか?僕はとにかく冷くみつけようと考えた。その努力は約二十分続き幕がおりた時解放された。僕は観客を眺めた。思わず怒りが笑いに変化した。何と観客の真面目な、そして芸術(?)を解しようとするむなしい努力に疲れきった顔、そこにユーモアを感じ涙が出そうになる程の笑いを感じた。私は、青年会議所の優秀なメンバー達との踊りと音楽に対する批判を交換した。曰く「あの電子音楽には二、三度椅子からとびあがりました」曰く「いや全く」曰く「驚きましたな」曰く「なる程ききしにまさるものです」すべての友人の顔には怒りは消え、笑顔が浮んでいた。しかし僅かな時間でその倍以上の疲労の色がみえていた事も事実だ。私は、最後の舞台までマース・カニングハムと戦い続けた。少なくとも僕は、どんな前衛芸術でも高度のものは、大衆をどこかで納得させるものがあるはずだと考える。それがいいというのは滅びる芸術と考えるでもないのか。前衛はいつか正統派になるに違いない。もし、こういう舞踊が最高の芸術とみなされるときがくるのなら……僕は芸術を話したくないし、理解出来なくても恥としない。僕はそう思いながら人を押し伏せるようなこのカニングハムの舞踊を見終った後のやり場のない不愉快さをどうまぎらわすかと、劇場を出て街の雑沓の中へ入っていった。



X'masの装い.....



神戸眼鏡院

元町3丁目 TEL ③3 112-3

北欧の銘菓

幣社の登録商標



- ☐ ピラミッドケーキ
- ☐ バウムクーヘン
- ☐ クツキ
- ☐ ムンデット
- ☐ シモン

**ユーハイム
コンフェクト**

本社・工場 神戸熊内町1 (市立美術館東隣)
熊内店 TEL. 22-2336・1164・1165
三宮店 神戸三宮生田筋(階上喫茶室)
TEL. 33-7343・0156・4314

The Cosmopolitan

Valentine F. Morozoff

*クリスマスプレゼントとお歳暮用品に

日本で唯一っ！

外人エキスパートが
つくる最高級品



コスモポリタン チョコレート・キャンデー

神戸本社	神戸市生田区三宮町1丁目170	電話 33-5304
神戸直売店	神戸市生田区三宮町1丁目	電話 33-1217
大阪堺筋店	大阪市東区淡路町2丁目	電話231-6979
大阪心斎橋店	大阪市南区安堂寺橋通4丁目	電話251-4182
東京銀座店	東京都中央区銀座8丁目	電話571-2303
東京新宿店	東京都新宿区角筈1丁目	
	新宿ステーションビル地下2階	電話352-2436
千葉駅ビル店	千葉市新町千葉駅ビル名店街	電話 7-2534

Merry Christmas



ネクタイの

元町バザー

神戸×元町 TEL ③1401

□ 隨 筆 □

マリのユートピア

田 辺 聖 子

私の姪（妹の長女）の三才一ヶ月になる小さなマリはこの頃とみに、やんちゃになった。私の家へ来ると原稿を汚れた足でふみつけて、可愛い足型を残してゆく。私のことは「カキカキのおばちゃん」である。彼女の用例でいけば、動詞を二つづけて名詞にするくせがあるらしいので、作家というのをカキカキで表現するのであらうけれど、そしてそれは遅筆のせいでもしめきりに追われている私の状態をいい現わし得て妙ではあるものの、別に私は作家ではない。ただ自分が面白くて書いているので、書くことよりほかに自分を表現する、もっと適切な方法がみつければやめるかもしれない。ただあまりこれをいうとキザっぽいし厭味なので、冗談の通らぬ場所では黙っている。

私は頭はよくないが、それでも才能の限界を知っている程度には賢いつもりなので、その範囲内

で楽しく生きられることは何かと、いつも何かユートピアを夢みているわけである。私の芥川賞受賞は、到着点でも出発点でもない、一つの人生の乗換駅である。ユートピアがみつければ、そこから乗り換えてどこかへ去るかもしれない。——「自分を表現する適切な方法ってのは結婚することかい？」と世間はきくであらう。世間は独進者を目のカタキにして檻の中へ押込めるのにやっきになっている。そこでよく女優さんなどが結婚すると、「女の幸せと喜びを知りました」なんて手記や談話を発表する。すると世間はニンマリしてやっとな安心する。私にもそういわせたいのであらうけれど、どっこい、そうは問屋がよろさない。そんなこと、誰がいつてやるもんか、ヤーイ、世間のとんまめ。

もつとも、誤解しないでほしいのは、これは私がとくべつ男性に懐^{あこが}れと敬愛の念をもっているか

らであって、男性をナメているからでは決してない。男性というものは「夜目遠目傘の内」で、遠くから見ればみるほどすばらしいものだと思っているから、なるったけいつまでも遠くからあがれていようと思つていのである。広い世の中に一人位は、そういう女がいても、殿方は許して下さるだろう。

ついでに言つとくと、私の、自分を表現する方法の一つに、たとえば女ペンキ屋になる方法もある。よく晴れた日、足場の上でためつすがめつペンキを塗っている自分を想像しただけでも心が躍る。それにペンキ屋はいかに上手に絵や字を書いても無署名の仕事だ。それも謙虚でよい。ユートピアの中の私の姿だ。

ところでわが小さきマリにもユートピアはある。彼女はどこからかNAGUYAという言葉をおぼえて来た。我々の親戚一族にも名古屋在住の者はいないし、全然関係ないのにどこでその地名を拾つて来たのかわからない。テレビでもききかじったんじゃないかしらと、妹もふしんがつていた。ナ・ゴ・ヤという美しい丸みのある母音のひびきがマリの小さい耳に感銘深く残ったのかもしれない。彼女の言葉でユートピアを推察できるのである。

「ナゴヤの姉ちゃまは髪が長くて綺麗で、ピンをさしてるの」

ナゴヤは美人が多いらしい。

「そのピンの先に綺麗な珠が一杯ついている」

ナゴヤ・シティは裕福らしい。

「そしてお手々にはチョコレートとリンゴが沢山

はいつた籠を提げて、赤い靴はいてるの」マリの好きなものばかり並べている。

いつかパパがおそくまで残業して帰宅すると、マリは早速、

「あのね、ナゴヤの社長はいいのよ。朝はおそく出て、夜は早ア帰らせるのよ」

といった。ナゴヤは労働条件もいいらしい。パパが好きなマリは、ちょっとでも長くそばに居てもらいたいので、小さい頭でありつたけのユートピアを思い描くのであらう。

もう一つのユートピア。オリンピック最中、あるテレビ番組に日本人Y氏と三人のポルトガル人が出た。Y氏は早大出身、ポルトガルの水泳コーチとして渡られ、此のたびオリンピック派遣選手と共に六年ぶりに帰国されたのだった。同席しているのは中年の副監督と、アラン・ドロンもはだして逃げるような凄美貌のポルトガル青年が二人。これは教え子の水泳選手で言葉が分らずニコニコしている。Y氏の話ではポ国人はのんびりやで、行った当座は竹の鞭で尻を叩いて追いまくったが今ではこつちまでのんびりやがうつたのこと。彼らは水泳でも負けた時はやや残念がるが、すぐ忘れるから成績は言わぬが花。Y氏自身、あまり苦にしておられぬようすがおかしい。ポルトガル美人を奥さんに迎え、母上もあちらへ引きとられたとのこと。お二人とも向うへおいて来られた所をみると、さぞ嫁姑、人種は違つても仲むつまじいのか。ポルほけです、と笑われるY氏は、何となく一拍ずれたような楽しい雰囲気、本当にその国が、ユートピアに思われた。

(作家)